

18・19 世紀の上部ドイツ語圏における言語規範意識*

－新聞と書簡・筆談帳における前置詞 *wegen* の格支配を例にして

佐藤 恵

1. *wegen* の 3 格支配は「近いことば」的であったのか？

現代ドイツ語において、前置詞 *wegen* の格支配としては 2 格と 3 格とが並存している。「最近では与格（3 格）を支配することが増えてきている」（ヘンツェル / ヴァイト 1994: 262）という指摘から、*wegen* の 3 格支配は最近の現象であるかのような印象を受ける。しかし、筆者が佐藤（2015）および Sato（2015）において自らの「散文コーパス 1520-1870」¹⁾をデータとして、16 世紀～19 世紀における *wegen* の格支配の変遷を跡づけたところ、3 格支配は現代ドイツ語のみに見られる現象ではなく、すでに 17 世紀後半には現れていたことが判明した。その際、*wegen* の 3 格支配の言語地域的特性と通時的変化として、佐藤（2015）および Sato（2015）は次の 2 点を結論として得た。

- 1) *wegen* の 3 格支配は全般として、中部・北部ドイツ語圏よりも上部ドイツ語圏においてはるかに頻度が高い。
- 2) 1800 年頃を境として、とりわけ上部ドイツ語圏において *wegen* の 3 格支配は急激に減少した。

したがって、前置詞 *wegen* の格支配の変遷を観察するうえで、言語地域としては上部ドイツ語圏が、時期としては 1800 年前後がとりわけ注目すべき調査対象であると言える。

* 本論文は、日本学術振興会特別研究員 DC1（課題番号 26・10892）としての助成による研究成果を一部含むものである。ここに記し、謝意を表する。

1) 1520 年～1870 年のドイツ語書籍計 140 冊（上部ドイツ語圏で出版された 70 冊、および中部北部ドイツ語圏で出版された書籍 70 冊）からなるコーパスである。総語数は約 2500 万語である。詳細については、佐藤（2015: 99）および Sato（2015: 30）を参照。

さて、wegen の 3 格支配は「まさに話しことばにおいて許容される」(Duden 2009: 612)、「話しことばにおいてはまだ許容されることが『書きことばにおいてよりも』多い」(Duden 2016: 624)²⁾ という Duden 文法の発言に依拠するならば、現代ドイツ語において 3 格支配は話しことば的な変種、つまり Koch/Oesterreicher のモデル (Koch/Oesterreicher 1985: 23) で言うところの「近いことば」(Nähesprache) の領域に位置する変種であって、規範性が相対的に高い書かれたことば、「遠いことば」(Distanzsprache) の領域においては避けられると考えることができる。

では、wegen の 3 格支配は歴史的段階においても近いことば的であったのであろうか。筆者の上述の「散文コーパス 1520-1870」は、近いことば性が相対的に高いと想定される説教集から、遠いことば性が相対的に高いと考えられる新聞まで、さまざまなジャンルが入っているコーパスであった。本論文では、これまでの筆者自身の調査結果を補完し、さらに精密な分析が可能となるように、「近いことば」の領域に位置づけられるテキストと、規範性が相対的に高い「遠いことば」の領域に位置づけられるテキストとを明確に比較することによって、歴史的段階においても近いことばのテキストのほうに wegen の 3 格支配が高い頻度で用いられ、規範性が相対的に高い遠いことばのテキストのほうに 2 格支配が高い頻度で用いられていたかどうかについて明らかにしたいと思う。その際、言語地域としては上述のように wegen の 3 格支配の頻度が高かった上部ドイツ語圏に注目し、対象とする時代としては、3 格支配の頻度に大きな変化が生じた 1800 年前後、つまり 18 世紀後半から 19 世紀前半に焦点を当てる。その調査結果を踏まえることで、この時代の上部ドイツ語圏における言語規範意識のあり方の一端が明らかになるであろう。分析対象とする近いことばのテキストとしては、ちょうどこの時代に書かれたモーツァルト家の書簡とベートーヴェンの筆談帳を用いる。書簡は、「他のテキスト種類よりもことばのバリエーション、また話しことばの特徴が表れやすいテキスト種類」(Reiffenstein 2009a: 48) とされ、同じことは筆談帳にも言える。遠いことばのテキストとしては、新聞を分析の対象とする。

2) Duden (2016) ではさらに、書きことばコーパス (Duden コーパス、および IDS コーパス) において、前置詞 wegen の 3 格支配は単数・複数共に 1% しか出現していないと報告されている (Duden 2016: 624 を参照)。

2. 新聞における wegen の格支配

2.1. 「新聞コーパス 1750-1850」

筆者は、1750年から1850年の100年間に出版された新聞テキストをデータとして、wegenの用例を収集した。これを「新聞コーパス 1750-1850」と名づけておく。この「新聞コーパス 1750-1850」は、以下の新聞からなる³⁾：

中部・北部ドイツ語圏で発行された新聞

(実際に分析対象とした新聞テキストの総語数：約 1930 万語)：

- A) *Göttingische Anzeigen von gelehrten Sachen*, 1771–1850 (Göttingen)
- B) *Zeitung für die elegante Welt*, 1802–1850 (Berlin/Leipzig)
- C) *Neue Zeitungen von gelehrten Sachen*, 1750–1772 (Leipzig)
- D) *Gothaische gelehrte Zeitungen*, 1774–1804 (Gotha)
- E) *Neue Jenaische allgemeine Literatur-Zeitung*, 1804–1848 (Leipzig)
- F) *Deutsche Allgemeine Zeitung*, 1845–1850 (Leipzig)

上部ドイツ語圏で発行された新聞

(実際に分析対象とした新聞テキストの総語数：約 6680 万語)：

- G) *Münchner-Zeitung*, 1750–1850 (München)
- H) *Wiener Zeitung*, 1750–1850 (Wien)

3) オーストリア国立図書館の *Historische Zeitungen und Zeitschriften (ANNO)*、およびバイエルン州立図書館 (BSB) 所蔵のデジタル化された新聞を資料として、(例えば、1750–1759 年、1760–1769 年のように) 10 年を一区切りとし、各 10 年間から (例えば 1770–1779 年の場合、1772 年分と 1777 年分のように) 少なくとも 2 年分の新聞を選び出して、地域別 (上部ドイツ語圏と中部・北部ドイツ語圏) に調査を行った。調査した新聞の発行年は以下の通りである (特に記載のない年は 12 ヶ月分を資料とした)：A) Göttingen: 1772, 1777, 1782, 1787, 1792, 1797, 1802, B) Berlin/Leipzig: 1802, 1804, 1812, 1817, 1821, 1829, 1831, 1837, 1842, 1846, C) Leipzig: 1751, 1757, 1762, 1772, D) Gotha: 1777, 1782, 1787, 1792, 1802, E) Leipzig: 1807, F) Leipzig: 1847, G) München: 1751 (Jan.-Juni), 1754, 1756 (Jan.-Juni), 1764, 1766, 1771, 1776, 1783, 1788, 1792, 1797, 1802, 1807, 1813, 1818, 1823, 1826, 1833, 1838, 1843, 1847, H) Wien: 1752, 1753, 1764, 1768, 1774/1778/1783/1788/1793/1798/1803/1808/1813/1818/1823/1828/1833/1838 (Jan.-Juni), 1843/1848 (Jan.-März). なお、「散文コーパス 1520-1870」における調査の際と同様に、調査の対象とした語形は 2 格形と 3 格形が明確に判別可能な男性・中性単数名詞と結びついたものに限定した。その際、人称代名詞 (例えば wegen seiner, seinetwegen, wegen ihm)、および指示代名詞 (例えば wegen dessen, wegen dem) は分析の対象外とした。

2.2. 上部ドイツ語圏の新聞テキストにおける傾向

「新聞コーパス 1750-1850」を調査した結果、中部・北部ドイツ語圏の新聞においては、wegen の用例が 1582 例あり、うち 2 格支配が 1556 例（98.35%）、3 格支配が 26 例（1.64%）、上部ドイツ語圏の新聞では、wegen の用例が 5485 例あり、うち 2 格支配が 4854 例（88.49%）、3 格支配が 631 例（11.50%）確認できた⁴⁾。「新聞コーパス 1750-1850」における wegen の 2 格支配と 3 格支配の分布を、「中部・北部ドイツ語圏」と「上部ドイツ語圏のミュンヘン」、「上部ドイツ語圏のウィーン」に分けて示したのが、次に挙げる〔表 1〕である：

〔表 1〕「新聞コーパス 1750-1850」における wegen の 2 格・3 格支配の分布

新聞コーパス 1750-1850									
	中部・北部ドイツ語圏の新聞 (Berlin, Leipzig, Gotha, Göttingen)			上部ドイツ語圏の新聞 (München)			上部ドイツ語圏の新聞 (Wien)		
	Genitiv	Dativ	Σ	Genitiv	Dativ	Σ	Genitiv	Dativ	Σ
1750-1759	100% (49)	0	49	79.19% (137)	20.80% (36)	173	90.36% (272)	9.63% (29)	301
1760-1769	100% (33)	0	33	80.15% (101)	19.84% (25)	126	87.96% (190)	12.03% (26)	216
1770-1779	97.20% (278)	2.79% (8)	286	81.42% (57)	18.57% (13)	70	77.39% (113)	22.60% (33)	146
1780-1789	98.25% (281)	1.74% (5)	286	65.74% (119)	34.25% (62)	181	89.00% (170)	10.99% (21)	191
1790-1799	96.75% (209)	3.24% (7)	216	59.04% (111)	40.95% (77)	188	88.10% (237)	11.89% (32)	269
1750-1799	97.70% (850)	2.29% (20)	870	71.13% (525)	28.86% (213)	738	87.44% (982)	12.55% (141)	1123
1800-1809	98.57% (276)	1.42% (4)	280	87.11% (169)	12.88% (25)	194	85.57% (172)	14.42% (29)	201
1810-1819	100% (150)	0	150	91.85% (203)	8.14% (18)	221	81.78% (229)	18.21% (51)	280
1820-1829	99.21% (127)	0.78% (1)	128	95.25% (241)	4.74% (12)	253	90.93% (341)	9.06% (34)	375
1830-1839	100% (89)	0	89	98.81% (333)	1.20% (4)	337	91.72% (654)	8.27% (59)	713
1840-1850	98.46% (64)	1.53% (1)	65	97.97% (483)	2.02% (10)	493	93.71% (522)	6.28% (35)	557
1800-1850	99.15% (706)	0.84% (6)	712	95.39% (1429)	4.60% (69)	1498	90.21% (1918)	9.78% (208)	2126
1750-1850	98.35% (1556)	1.64% (26)	1582	87.38% (1954)	12.61% (282)	2236	89.25% (2900)	10.74% (349)	3249
	中部・北部ドイツ語圏			上部ドイツ語圏 (München, Wien)					
1750-1850	98.35% (1556)	1.64% (26)	1582				88.49% (4854)	11.50% (631)	5485

この調査結果から、特に重要な傾向として以下の 2 点が確認できる：

- 1) wegen の 3 格支配は、中部・北部ドイツ語圏の新聞よりも上部ドイツ語圏の新聞に多い。
- 2) 上部ドイツ語圏の『ミュンヘン新聞』においては、1800 年を境として 3 格支配が激減している。

4) 〈2 格 + wegen〉という wegen が後置される変種も〈wegen + 2 格〉と同様、2 格の用例に含む。

第 1 点について見てみると、中部・北部ドイツ語圏の新聞において 3 格支配は、1750-1850 年の全期間を通して平均 1-3% しか使用されていないが、上部ドイツ語圏の『ミュンヘン新聞』において 18 世紀後半（1750-1799 年）ではおよそ平均 30% の割合で 3 格が用いられている。『ウィーン新聞』においても、3 格支配の出現頻度は比較的高く、全期間を通して平均 10% の割合で出現している。したがって、ドイツ中部・北部と比較すると、上部ドイツ語圏で明らかに 3 格の出現頻度は高いと言える。第 2 点に関しては、『ミュンヘン新聞』について 18 世紀後半と 19 世紀前半における 3 格の出現状況を対数尤度比による有意差検定で比較してみると、3 格が 1800 年を境に有意差をもって激減していることが、次の [表 2] のように確認できる。

[表 2] 『ミュンヘン新聞』における wegen の 3 格支配の出現頻度の有意差検定⁵⁾
19 世紀 (O1: 1800-1850) vs 18 世紀 (O2: 1750-1799)

Item	O1	%1	O2	%2	LL	%DIFF	Bayes	ELL	RRisk	LogRatio	OddsRatio
Word	69	4.61	213	28.86	-213.68	-84.04	205.97	0.02108	0.16	-2.65	0.12

-213.68 という対数尤度比 (LL) の値は、コーパス 1 (O1: 19 世紀) のほうがコーパス 2 (O2: 18 世紀) よりも調査項目 (wegen の 3 格支配) の出現頻度が有意差をもって低いということを表している。

一方、『ウィーン新聞』においては [表 1] を見る限り、同じ上部ドイツ語圏であつても『ミュンヘン新聞』の場合と異なり、1800 年を境とした大きな変化は一

5) この表は、Paul Rayson による対数尤度比 (Log Likelihood: LL) の計算法に依拠したものである (Rayson 2016)。上段の O1 とはコーパス 1 (19 世紀) における調査項目の総用例数、%1 はコーパス 1 (19 世紀) における調査項目の出現頻度を示している。同様に、O2 とはコーパス 2 (18 世紀) における用例数、%2 はコーパス 2 (18 世紀) における調査項目の出現頻度を表している。LL は対数尤度比の値であり、マイナスがついた値はコーパス 1 (19 世紀) においての方がコーパス 2 (18 世紀) より調査項目の出現頻度が低いことを表している。0.1% 水準の場合、つまり、有意な差があるという判断が誤りである可能性が 0.1 パーセント以下しかないという水準の場合 ($p < 0.001$)、その判断を棄却する限界値となる対数尤度比は 10.83 である。つまり対数尤度比が 10.83 を上回る場合、二つの出現頻度には有意な差があると言える。この対数尤度比の数値が高いほど、二つの出現頻度の差はより有意で顕著である。

見したところ観察できない。これはどう解釈すればよいのであろうか。そこで『ウィーン新聞』について、1880 年まで時代を 30 年間さらに広げて調査してみた結果が〔表 3〕である⁶⁾。

〔表 3〕『ウィーン新聞』における wegen の 2 格・3 格支配の分布 (1750-1880)

	上部ドイツ語圏の新聞 (Wien)		Σ
	Genitiv	Dativ	
1750-1759	90.36% (272)	9.63% (29)	301
1760-1769	87.96% (190)	12.03% (26)	216
1770-1779	77.39% (113)	22.60% (33)	146
1780-1789	89.00% (170)	10.99% (21)	191
1790-1799	88.10% (237)	11.89% (32)	269
1750-1799	87.44% (982)	12.55% (141)	1123
1800-1809	85.57% (172)	14.42% (29)	201
1810-1819	81.78% (229)	18.21% (51)	280
1820-1829	90.93% (341)	9.06% (34)	375
1830-1839	91.72% (654)	8.27% (59)	713
1840-1849	93.71% (522)	6.28% (35)	557
1850-1859	96.46% (1036)	3.53% (38)	1074
1860-1869	99.35% (1387)	0.64% (9)	1396
1870-1880	100% (1393)	0	1393
1800-1880	95.74% (5734)	4.25% (255)	5989

このデータに関して、3 格の出現について対数尤度比による有意差検定を行ってみると、次の〔表 4〕のように、『ウィーン新聞』においては 19 世紀に入って 3 格支配が激減していると解釈できることが確認できる。

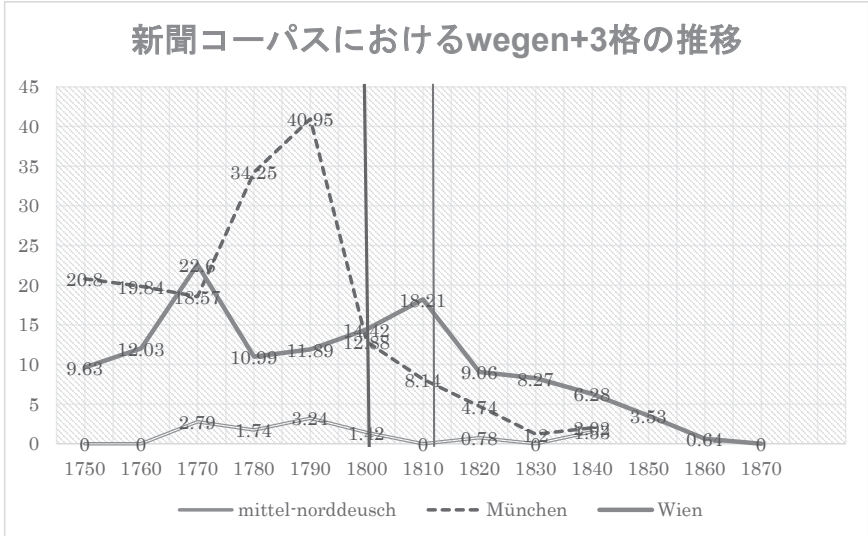
6) 30 年分の追加調査の資料として用いた『ウィーン新聞』の発行年は、以下の通りである（いずれの年も 1 月～3 月に発行された新聞 3 ヶ月分を調査した）：
1850/1857/1863/1868/1873/1878 (Jan.-März).

[表 4] 『ウィーン新聞』における wegen の 3 格支配の出現頻度の有意差検定
19 世紀 (O1: 1800-1880) vs 18 世紀後半 (O2: 1750-1799)

Item	O1	%1	O2	%2	LL	%DIFF	Bayes	ELL	RRisk	LogRatio	OddsRatio
Word	255	4.26	141	12.56	-92.47	-66.09	83.60	0.00314	0.34	-1.56	0.31

-92.47 という対数尤度比の値は、コーパス 1 (O1:1800-1880 年) においての方がコーパス 2 (O2:1750-1799 年) より調査項目の出現頻度が低い、言い換えると、19 世紀に入って wegen の 3 格支配が有意差をもって減少していることを表している。つまり『ウィーン新聞』の場合、『ミュンヘン新聞』とほぼ同時期の 1810 年頃を境にして 3 格支配の激減が起こったと言うことが許される。この状況は、次の [表 5] のように表すことができる。(1800 年のところにある縦棒は『ミュンヘン新聞』における 3 格支配減少の分岐点、1810 年のところにある縦棒は『ウィーン新聞』における 3 格支配減少の分岐点を便宜的に表している。)

[表 5] 新聞コーパスにおける wegen の 3 格支配の出現頻度の推移 (数値は%)



したがって、規範性が相対的に高い遠いことばの領域にある上部ドイツ語圏の新聞 (『ミュンヘン新聞』と『ウィーン新聞』) は、19 世紀以降に入ると、wegen

の3格支配が明らかに減少した、すなわち2格化が明らかに進んだことになる。

3. 書簡と筆談帳における格支配の使い分け

3.1. モーツァルトの書簡：1755–1791 年

では、上部ドイツ語圏の近いことばの領域においては、wegen の2格支配と3格支配はどのような状況にあったのであろうか。上部ドイツ語圏の近いことばの資料として、まずモーツァルト家の書簡を分析してみたいと思う。Bauer と Deutsch の編集したモーツァルト家の書簡資料（1962–1975 年刊行）には、1477 通（1755–1857 年）の書簡が収録されている。その1477通には、計322例の wegen の用例が確認できた。この322例のうちほぼ9割（293例）を占めるのが、父レオポルト・モーツァルトの書簡（1755–1787年）とヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（以下、必要に応じて「W. A. モーツァルト」と略記する）の書簡（1769–1791年）である。この293例を分析の対象とする⁷⁾。その結果、モーツァルト関連の書簡として本論文が分析対象とする時期は、18世紀後半の1755–1791年であることになる。

父レオポルト（Leopold Mozart: 1719 Augsburg – 1787 Salzburg）は、[表6]にあるように、書簡のなかで wegen を204回用いており、うち2格が38例（18.62%）、3格が166例（81.37%）である。そのなかで、家族に宛てた書簡では2格が20例（12.42%）、3格が141例（87.57%）であり、より頻繁に3格を使用している。一方、家族以外に宛てた書簡においては、2格が18例（41.86%）、3格が25例（58.13%）で、2格の使用頻度が家族宛の場合と比べると相対的に高い。

7) 残る29例は、W. A. モーツァルトの母 Mozartin (Maria Anna Pertl: 1720 St. Gilgen – 1778 Paris)、妻コンスタンツェ (Constanze Mozart: 1762 Zell im Wiesental, Vorderösterreich – 1842 Salzburg)、姉ナンネル (Maria Anna Walburga: 1751 Salzburg – 1829 Salzburg)、息子たちの書簡に見出せる。しかし、妻コンスタンツェの書簡（計20例）は実際にはデンマーク人の再婚相手 Georg Nikolaus Nissen が代筆したものであって、コンスタンツェは署名をしているにすぎない (Reiffenstein 2009a: 53 を参照) ので、分析対象となりうるのは、この20例を引いた9例しかない。この残り9例の内訳としては、18世紀に書かれた書簡（母のもの）に4例、19世紀に書かれた書簡（姉と W. A. モーツァルトの2人の息子のもの）に5例が見られるのであるが、19世紀の用例は1804年（2例）、1806年のあと、1842年、1854年と大きく隔たっていることもあり、通時的分析をするにも適切ではない。以上の理由から、本論文での分析対象としては、父レオポルトと W. A. モーツァルトの書簡に限定することとした。

[表 6] レオポルト・モーツァルト (父) の書簡における 2 格・3 格支配の使い分け

Absender: Leopold Mozart (1719 Augsburg-1787 Salzburg)			
	Genitiv	Dativ	Insg.
Wolfgang (Sohn)	16.32% (8)	83.67% (41)	49
Mozartin (seine Frau)	15.55% (7)	84.44% (38)	45
Nannerl (seine Tochter)	7.57% (5)	92.42% (61)	66
Nannerls Mann (Schwiegersohn)	0	1 (100%)	1
seine Familie (insg.)	12.42% (20)	87.57% (141)	161
Lotter	46.15% (6)	53.84% (7)	13
Breitkopf & Sohn	50% (1)	50% (1)	2
Hagenau	39.28% (11)	60.71% (17)	28
außer der Familie (insg.)	41.86% (18)	58.13% (25)	43
insg.	18.62% (38)	81.37% (166)	204

家族と家族以外という宛先の違いによるこの相違は、何に由来するのであろうか。アウクスブルクの職人（製本業）の家に生まれたレオポルトは、アウクスブルクのギムナジウム、1737 年からはザルツブルク大学で学んでいる。Reiffenstein (2009a) によると、レオポルトは教養のある、ことばに精通した人物で、標準語の規範にならったことばを書いた (Reiffenstein 2009a: 51 を参照)。レオポルトは自らの著書『ヴァイオリン教程』 („Versuch einer gründlichen Violinschule“ 1756 年) の出版をめぐり、何度も出版業者ロッター (Johann Jakob Lotter: 1726 Augsburg – 1804 Augsburg)⁸⁾ と書簡のやり取りをしているが、そのなかでたびたびゴットシェート (Johann Christoph Gottsched: 1700–1766) のドイツ語文法書に言及し

8) 出版業者ロッター (Johann Jakob Lotter) は仕事上のパートナーであると同時に、レオポルトの友人でもあった。ちなみに、1755 年 12 月 29 日付の書簡において、レオポルトは新年の挨拶のあと、ロッター家に子どもが誕生したことに対して、次のように 3 格支配の *wegen* を用いながら (!) お祝いのことばを述べている (引用箇所の大文字は筆者による): „Es hat uns beyde erfreuet, daß dero fr Gemahlin so geschwind und glücklich ihre Bürde abgelegt hat. Es wird wohl der gähe Schröcken das meiste beygetragen haben, den sie **wegen dem Erdbeben** der zu Augspurg war, gehabt hat: denn die Schröcken sind gemeinlich Ursache einer schnellen Entbindung. [...]“ (Mozart. *Briefe und Aufzeichnungen*. Bd.1: 27) 「奥方がこんなにも早く、そして無事にお子さんを出産されたことに私たちも喜んでいる。アウクスブルクで地震があったために、びっくりしたことが大いに幸いしたんじゃないだろうか。驚くことでお産が早まるということは、よくあることだからね。」

ている⁹⁾。このような言語規範に関する意識の高さが、公的な性格が相対的に高い家族以外宛の書簡においてレオポルトに *wegen* の 2 格支配を選ばせたと解釈ができるのではないだろうか。その場合、18 世紀中頃における *wegen* の 2 格支配は、レオポルトの言語意識のなかで遠いことばの領域に属していたということになる。次の、18 世紀の上部ドイツ語圏における標準ドイツ語の受け入れの実態に関する Reiffenstein (2009a) の発言は、この解釈を支えるものである。

手書きのテキストや私的な言語使用においては、書き手の年齢、教育、社会的身分によって違いはあるものの、古くからの上部ドイツ語の伝統が守られていた。一方、印刷されたテキストにおいてはゴットシェート (『ドイツ語文法の基礎づけ』1748 年) や少し遅れてアーデルング (『ドイツ語詳細体系』1782 年) がライプツィヒから普及させた東中部ドイツ語的な標準語の規範がすでに広く受け入れられていた。(Reiffenstein 2009a: 49)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart: 1756 Salzburg – 1791 Wien) は、書簡のなかで *wegen* を 89 回用いており、格支配の使い分けは次の [表 7] のように示すことができる。

9) 例えば 1755 年 6 月 9 日にアウクスブルクの出版業者ロッターに宛てた書簡の中で、レオポルトは「私の原稿 49 ページの 3 行めに *erforderet* と書いてあるのだが、ゴットシェートの 285 ページには *fordern* とあり、またフリッシュ (Frisch [筆者注: Johann Leopold Frisch: *Deutsch-Lateinisches Wörter-Buch*, Berlin 1741 のこと]) も辞書のなかで *fordern* と書いている。したがって *erforderet* ではなく、*erfordert* と最後の *e* を取った方がいいかもしれない。」(Mozart. *Briefe und Aufzeichnungen*. Bd.1: 5) と書いている。このように、レオポルトがゴットシェートに言及している箇所は、筆者が調査しただけでも、『ヴァイオリン教程』の出版前年である 1755 年に書かれた書簡 5 通 (6 月 9 日、7 月 7 日、7 月 10 日、8 月 28 日、11 月 6 日付の書簡) のなかに認められる。

〔表 7〕 W.A. モーツァルトの書簡における 2・3 格支配の使い分け

Absender: Wolfgang Amadeus Mozart (1756 Salzburg–1791 Wien)				
	Genitiv	Dativ	insg.	
Leopold (Vater)	10.66% (8)	89.33% (67)	75	Leopold Mozart (1719 Augsburg-1787 Salzburg)
Nannerl (Schwester)	50% (1)	50% (1)	2	Maria Anna Walburga (1751 Salzburg-1829 Salzburg)
Thekla (Cousine)	50% (1)	50% (1)	2	Maria Anna Thekla Mozart (1758 Augsburg-1841 Bayreuth), Cousine von Mozart
Constanze (seine Frau)	80% (4)	20% (1)	5	Maria Constanze Mozart (1762 Zell im Wiesental, Vorderösterreich-1842 Salzburg)
seine Familie (insg.)	16.66% (14)	83.33% (70)	84	
Erzherzog Franz von Österreich	100% (1)	0	1	Franz IV, Erzherzog von Österreich, Herzog von Modena, Massa und Carrara (1779-1846)
Gottfried von Jacquin	0	100% (1)	1	Jacquin, Emilian Gottfried von (1767-1792), Freund von Mozart
Martha Elisabeth Baronin	0	100% (3)	3	Waldstätten, Martha Elisabeth von (1744-1811), Gönnerin Mozarts
außer der Familie (insg.)	20% (1)	80% (4)	5	
insg.	16.85% (15)	83.14% (74)	89	

〔表 7〕 が示しているように、W. A. モーツァルトは、全 89 例のうち、2 格を 15 例（16.85%）、3 格を 74 例（83.14%）用いている。身内に宛てた書簡では 2 格が 14 例（16.66%）、3 格が 70 例（83.33%）であり、父レオポルトと同様に 3 格を多く使っている。家族以外の人に対しても、（総用例数は多くはないが）2 格が 1 例（20%）、3 格が 4 例（80%）となっており、父の場合とは違って 3 格が多い点が注目に値する。

以上のことから、18 世紀後半におけるモーツァルト父子の書簡においては、wegen の 3 格支配は近いことば的、2 格支配は遠いことば的であったと解釈される。wegen den väterlichen brief (sic!) ¹⁰⁾ のような「疑似 4 格的な 3 格」（Akkudativ）は、話しことば的であることが知られているが、この Akkudativ が W. A. モーツァルトに多く見られるのである（全部で 74 例ある 3 格支配のうち 26 例）¹¹⁾。

10) 1778 年 2 月 14 日付の書簡より引用：„Ich bin ihnen mein lieber Papa sehr verbunden wegen den väterlichen brief denn sie mir geschrieben, ich werde ihn im schatz aufheben, und allzeit gebrauch davon machen.[...]“(*Mozart. Briefe und Aufzeichnungen*. Bd.2 : 281)「大好きなパパ、パパがぼくに書いてくれた、父親らしい手紙にはとても感謝しています。ぼくはこの手紙を大事に取っておいて、いつでも読み返すつもりです。」（太字は筆者による）。

11) このような一見 4 格に見える Akkudativ は、**dem** という音韻がルースに発音された **den** となったものである。実際には 3 格であるので、筆者は 3 格の用例として数え上げた。一方、父レオポルトの書簡には、このような Akkudativ は、全部で 166 例ある 3 格支配のうち 6 例（家族に対して 5 例、家族以外に対して 1 例）のみ確認できた。

3.2. ベートーヴェンの筆談帳：1818–1827 年

前述のように、本論文で近いことばの分析対象としたモーツァルト関連の書簡データは 18 世紀後半（1755–1791 年）に限られた。そこで、19 世紀前半における上部ドイツ語圏の近いことばのデータを補完すべく、ベートーヴェン（Ludwig van Beethoven: 1770 Bonn – 1827 Wien）の筆談帳（1818–1827 年）を用いたいと思う。筆談帳でなされる会話の舞台はウィーンであり、ベートーヴェンの会話相手もウィーン出身の人物がほとんどである。晩年に聴覚を失ったベートーヴェンが家族や知人と交わした筆談帳は、過去の話しことばを再構成するのに極めて重要な資料となる。そこには、「音楽から政治、ワインの値段から出版社の計画、ゴシップから深刻な話題まで、作曲家と周囲の人々から発せられた個人的あるいは一般的な事柄」（ロックウッド 2010: 521）が書き連ねられている。

この筆談帳の分析についてはすでに、Sato（2015: 26ff.）で言及しているので、ここでは概略だけを述べながら、新たにいくつかコメントを加えることとする。次の〔表 9〕は、筆談帳におけるベートーヴェン、および周囲の人びと（筆談帳に頻繁に登場する人物）による *wegen* の格支配の使い分けを示したものである。

〔表 9〕筆談帳における *wegen* の 2 格、3 格支配の使い分け（人物別）

	Genitiv	Dativ	Σ	Beziehung zu Beethoven
Bernard, Josef Karl	100% (8)	0	8	geb. um 1780 zu Horatitz in Böhmen, Schriftsteller, Journalist, Chefredakteur der Wiener Zeitung (1819–1847)
Neffe Karl	72.09% (31)	27.90% (12)	43	geb. 1806 zu Wien, Neffe von Beethoven (12–21 Jahre alt in den Konversationsheften)
Oliva, Franz	58.33% (7)	41.66% (5)	12	Freund von Beethoven
Holz	53.84% (7)	46.15% (6)	13	Freund von Beethoven. Violinist. Kassenbeamter beim niederösterreichischen Landschafts-, Obereinnehmeramt in Wien
Schindler, Anton	23.68% (9)	76.31% (29)	38	geb. 1795 zu Medl bei Mährisch-Neustadt, Violinist, Sekretär von Beethoven
Ludwig van Beethoven	9.09% (2)	90.90% (20)	22	geb. 1770 in Bonn
Schuppanzigh, Ignaz	0	100% (3)	3	geb. 1776 zu Wien, Violinist, Freund von Beethoven
Johann van Beethoven	0	100% (12)	12	geb. 1776 in Bonn, Bruder von Beethoven, Apotheker
andere Personen	61.53% (8)	38.46% (5)	13	Janschikh (Gen. 1, Dat. 0), Czerny (0,1), Wähner (1,0), Schickh (1,0), Unbekannter (1,1), Lichnowsky (1,0), Braunhofer (1,0), Verwalter (0,1), Haslinger (1,0), Breuning (1,0), Artaria (0,1), Wawruch (1,0)
	43.90% (72)	56.09% (92)	164	

筆談帳において、前置詞 *wegen* は計 164 回用いられており、そのうち 2 格が 72 例、3 格が 92 例ある。全体として 3 格がやや優勢であるが、しかし 3 格が圧倒的に多いわけではない。2 格のみを用いているベルナルト（Josef Karl Bernard:

1780 Horatitz in Böhmen – 1850 Wien) は、上部ドイツの出身ではなく中部ドイツの出身である¹²⁾。[表9]をよく見てみると、2格の全72例のうち40%強の例を、ベートーヴェンの甥であるカール (Karl van Beethoven: 1806 Wien – 1858 Josefstadt) が占めていることに気づく。カールは、ウィーン出身である。このカールが筆談帳のなかで wegen の格支配をどのように使い分けているのかを示したものが、次の [表10] である。

[表10] 筆談帳における2格、3格支配の使用割合 (甥カールの場合)

	Genitiv	Dativ	Σ
Neffe Karl an Ludwig van Beethoven	26 (92.8%)	2 (7.1%)	28
Neffe Karl an Johann van Beethoven (Beethovens Bruder)	2 (33.3%)	4 (66.6%)	6
Neffe Karl an andere Personen	3 (33.3%)	6 (66.6%)	9
	31 (72.0%)	12 (27.9%)	43

この表で明らかなように、カールは、伯父であるルートヴィヒに対しては、ほぼいつも (28 回中 26 回) 2 格を使用している。しかし、伯父ヨハン (ベートーヴェンの弟) や他の人びとに対しては、カールは 3 格をより多く (15 回中 10 回) 用いている。同じ伯父であるのに、ルートヴィヒに対してはほぼ一貫して 2 格を使用していることは、不自然に見える。このような 2 格の多用は、偉大な音楽家である伯父に対する敬意の表れ、あるいは過干渉¹³⁾であった伯父に対する拒絶の表れなのかもしれない。この甥による 2 格使用には、伯父であるベートーヴェンとの特定の心理的な距離が反映されている可能性があるという意味で、wegen の 2

12) ベルナルトは 1800 年にウィーンへ移住し、1815 年から『ウィーン新聞』の編集に携わっており、遅くとも 1819 年には『ウィーン新聞』の編集長 (Hauptredakteur) となって活動していた人物である (Frimmel 1926, Bd.1: 36 を参照)。本論文 2.2. で指摘した『ウィーン新聞』における wegen の 3 格支配の減少 (つまり 2 格支配のさらなる進行) の分岐点 (1810 年頃) と、ベルナルトが『ウィーン新聞』の編集長をし始めた時期が重なっているのは偶然かもしれないが、興味深い事実である。

13) カールが 9 歳の時にカールの父親 (Kasper Anton Karl 1774 Bonn – 1815 Wien) が亡くなり、そのあとカールの母親と 4 年にわたり裁判を続けた末に、ベートーヴェンはカール (当時 15 歳) の親権を獲得する。ベートーヴェンはカールが母親に会いに行くことを禁じ、離れて暮らしている間も甥を監視し続けた。「ベートーヴェンのカールに対する押しつけがましい愛情は、次第に耐えがたいほどのプレッシャーをカールに与え」(クーパー 1997:303)、ついに 1826 年 7 月 30 日、カールは自殺未遂を起こしている。

格支配は 19 世紀初頭のウィーンにおいて「遠いことば」¹⁴⁾であったと想定することが許されよう。カールにおける用例を除いた上で筆談帳における 2 格と 3 格の頻度を計算し直すと、2 格が 41 例、3 格が 80 例となり、2 格は 33.88% (41/121 例)、3 格は 66.11% (80/121 例) であることになる。

ここまでの調査結果をまとめてみよう。第 2 章で見たように、規範性が相対的に高い遠いことばの領域にある（上部ドイツ語圏の）『ウィーン新聞』では 1750 年～1850 年に 3 格支配が平均 10% 程度しかなかった。それに対して、近いことばの領域にある（上部ドイツ語圏の）モーツァルト関連の書簡においては、規範意識が高いモーツァルトの父でさえも、家族以外に対して 6 割近く、家族に対しては 9 割近く 3 格を使用していた。また、同じく近いことばの領域にある（上部ドイツ語圏の）ベートーヴェンの筆談帳においては、カールの用例を除いた計算では、3 格支配が 7 割近い。以上のことから、18 世紀後半から 19 世紀前半にかけての上部ドイツ語圏（ウィーン）においては、wegen の 3 格支配は近いことば的であったと言える。

3.3. ゲーテの書簡：1773–1832 年

18 世紀後半から 19 世紀前半にかけての wegen の格支配に関して、ここで新たに次の 2 つの疑問が浮かぶ。

- 1) 遠いことばの領域にある新聞テキストでは、wegen の 3 格支配は中部・北部ドイツ語圏よりも上部ドイツ語圏で頻繁に見られた。では、この言語地域的傾向性は、近いことばである書簡テキストにも見られるのだろうか？
- 2) 上部ドイツ語圏においては、wegen の 3 格支配は近いことば的であった。では、中部・北部ドイツ語圏においても 3 格支配は近いことば的であったのだろうか？

14) Koch/Oesterreicher (1985) は、コミュニケーションが「近い」か「遠い」かを決定づけるさまざまなパラメータ (Koch/Oesterreicher 1985: 23) として、「公的か私的か」、「書き手と読み手の間のコミュニケーション上の関係が近いか遠いか」、「対話なのか、モノロギックなのか」等を設定している。ここで言う「遠いことば」は、単に書きことば性が高いという意味だけでなく、このようなパラメータのなかで相対的に「遠い」領域に位置している（より「公的」で「書き手と読み手の関係が遠く」、「モノロギック的である」ということを表している。

この 2 つの問いに答えるべく、この節では中部ドイツ語圏における近いことばの資料として、ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe: 1749 Frankfurt am Main – 1832 Weimar) の書簡における格支配の使い分けを見ていきたい。

Bertram (1998) が編集した 1773 年から 1832 年の間に書かれたゲーテの書簡、約 13500 通を調査したところ、wegen の用例は 644 例あった。格支配の内訳は、文通相手別に (文通相手は計 187 名いるが、紙面の都合上、主要な人物のみを記載した)、次の [表 11] のように示すことができる。

[表 11] ゲーテの書簡における 2 格・3 格支配の使い分け

Absender: Johann Wolfgang von Goethe (1749 Frankfurt am Main-1832 Weimar)				
	Genitiv	Dativ	insg.	
Christiane (Frau)	100% (17)	0	17	Christiane von Goethe (1765 Weimar-1816 Weimar)
August (Sohn)	80% (16)	20% (4)	20	Julius August Walter Freiherr von Goethe (1789 Weimar-1830 Rom)
Ottile (Schwiegertochter)	75% (3)	25% (1)	4	Ottile Wilhelmine Ernestine Henriette von Goethe (1796 Danzig-1872 Weimar), Sie heiratete August von Goethe.
seine Familie (insg.)	87.80% (36)	12.19% (5)	41	
(Groß)herzog Carl August	86.53% (45)	13.46% (7)	52	Carl August von Sachsen-Weimar-Eisenach (1757 Weimar-1828)
Christian Gottlob Voigt	89.06% (57)	10.93% (7)	64	Christian Gottlob von Voigt (1743 Allstedt-1819 Weimar)
Friedrich Schiller	89.47% (34)	10.52% (4)	38	Johann Christoph Friedrich von Schiller (1759 Marbach am Neckar-1805 Weimar)
Johann Gottfried Herder	0	100% (2)	2	Johann Gottfried Herder (1744 Mohrungen, Königreich Preußen-1803 Weimar)
andere Personen	92.84% (415)	7.15% (32)	447	
außer der Familie (insg.)	91.37% (551)	8.62% (52)	603	
insg.	91.14% (587)	8.85% (57)	644	

すなわち、2 格は 587 例 (91.14%)、3 格は 57 例 (8.85%) であった。したがって、上部ドイツ語圏のモーツァルト関連の書簡と比較すると、中部ドイツ語圏のゲーテの書簡において 3 格支配は圧倒的に少ない。この限りにおいて、同じ書簡であっても、上部ドイツ語圏の書き手のほうに wegen の 3 格支配が頻繁に見られるということができる。

他方、同じ時期の中部ドイツ語圏の新聞 (『ライプツィヒ新聞』、『ゴータ新聞』) においては 3 格の出現は 1-3% 程度であったこと (→ 2.2) を踏まえると、その限りにおいて、中部ドイツでも遠いことば (新聞テキスト) よりも近いことば (書

簡テキスト) において 3 格が多く使用されていたとすることができる¹⁵⁾。ゲーテにおいて 3 格支配に近いことば的であったことは、規範性が相対的に高い遠いことばの領域に位置するゲーテ自身の論文等に 3 格がまったく見られなかったことによっても確証される。すなわち Bertram (2000) が編集した、ゲーテの書いた論文や紀行 (『色彩論』(Zur Farbenlehre, 1810)、『蒐集家とその一門の人々』(Der Sammler und die Seinigen, 1799)、『役者のための規則』(Regeln für Schauspieler, 1832)、『ヴィンケルマン』(Winckelmann, 1805)、『詩と真実』(Dichtung und Wahrheit, 1811-1833)、『イタリア旅行』(Italienische Reise, 1816-1817) における wegen の格支配を調査したところ、これらの著作においてゲーテは、[表 12] にあるように、すべて 2 格支配 (計 67 例) を使用していたのである。

[表 12] ゲーテの遠いことばテキストにおける 2 格・3 格支配の使い分け

	Genitiv	Dativ	Insg.	
Naturwissenschaftliche Schriften	100% (20)	0	20	Farbenlehre (1810) Bd.1, Bd.2
Ästhetische und philosophische Schriften	100% (6)	0	6	
Dichtung und Wahrheit	100% (23)	0	23	Der Sammler und die Seinigen (1799), Regeln für Schauspieler (1832), Winckelmann (1805)
Italienische Reise	100% (18)	0	18	
			67	Aus meinem Leben: Dichtung und Wahrheit. Erster Teil (1811), Zweiter Teil (1812), Dritter Theil (1814), Vierter Teil (1833)
				Italienische Reise. Erster Teil (1816), Zweiter Teil (1817)

以上のことから、上に提示した問いには次のように答えることができるであろう：

- 1) wegen の 3 格支配は、モーツァルトとゲーテを比較した限りにおいて、近いことばである書簡テキストでも中部・北部ドイツ語圏よりも上部ドイツ語圏で頻繁に見られる。
- 2) wegen の 3 格支配は、中部ドイツ語圏のゲーテにおいても近いことば的であったとすることができる。

15) ただし、ゲーテが wegen の 2 格支配を多く用いていたのは、地域的な要因のほかに、規範意識の強さの反映であると考えられる。ゲーテがアーデルングの文法書を参照していたことは、彼がシラーに宛てて書いた書簡 (1804 年 1 月 26 日付の手紙) 等からも明らかである。この手紙のなかで、ゲーテはシラーに宛てて、„Hier schicke ich meinen Adelung.“ (Goethe 1998) 「私のアーデルングを同封します。」と書いている。

4. 19 世紀におけるプロイセンの言語規範の浸透

すでに見たように、モーツァルトの父レオポルトは、18 世紀後半に家族以外に書簡を書いたとき、家族に書くときと比べて *wegen* の 2 格支配を相対的に多く用いていた。このことは、ゴットシェートの文法書に言及するほどに言語の規範意識が強かったレオポルトにとって、*wegen* の正規の格支配は 2 格であるという意識があったことに由来すると考えられる。*wegen* は 2 格支配が正規であるという言語意識は、そのあとほどなく 18 世紀末に、文法家アーデルング (Johann Christoph Adelung: 1732–1806) によって次のように定式化されることとなる。

wegen seinem Fleiße のように 3 格と結ぶのは、標準ドイツ語では誤りである。

(Adelung 1781: 349)

上部ドイツでこの前置詞が好んで 3 格と結ばれるのは誤りである。(Adelung 1786: 123)。

この規則は、アーデルングがプロイセンの文部省の委託を受けて著した学校文法書 (1781)、そしてさらに辞書 (1786) に示されたものである。アーデルング以降 19 世紀に入ってから、さまざまな文法書と辞書において *wegen* の 3 格支配に対する否定的な価値づけが次のようになされた：「南ドイツの非常によくある間違い」(Siebenkees 1808: 111)、「上部ドイツにおけるように 3 格と用いるのは正しくない」(Campe 1810: 612)、「*wegen* の後に決して 3 格が来てはいけない」

(Adelung/Schade 1824: 539)、「上部ドイツの統語法によれば、*wegen* は 3 格と結ばれることがある (しかし正しくない)」(Brentano 1870: 63-64)。*wegen* の 2 格支配を正しいとするこのプロイセン的な規則が、18 世紀末から 19 世紀にかけて学校教育を通じて広く教えられたことで、*wegen* は 2 格と結ぶべきであるという意識が 19 世紀に上部ドイツ語圏においても定着していったと考えることができる。Elspaß (2005) によれば、前置詞の 2 格支配は「19 世紀においてはまだ日常語に定着しておらず、教養ある書き手であることを示すしるし」(Elspaß 2005: 321) であった¹⁶⁾。

16) 筆者は Sato (2016) において、1750 年から 1850 年のドラマ (全 39 作品、*wegen* の用例数：79) における登場人物の台詞を話し手の社会的身分別に分析したところ、社会

3.2 で言及したように、19 世紀初頭のベートーヴェンの筆談帳において、甥カールは伯父ベートーヴェンに対しては、遠いことばとしての 2 格支配をほぼ毎回使用していた¹⁷⁾。教育熱心だったベートーヴェンのもと、カールは 17 歳になる 1823 年まで私立学校で教育を受けており、その後ウィーン大学に進学している。筆談帳が記録された 1818 年から 1827 年にちょうど就学年齢（12 歳～20 歳）にあった甥カールが、文法家アーデルングによって定められたプロイセンの言語規範を学校教育経由で学びとったと仮定することができよう。

W. A. モーツァルトの 2 人の息子は、19 世紀前半を生きた。カール・トーマス (Carl Thomas: 1784 Wien – 1858 Mailand) とフランツ・クサーヴァー (Franz Xaver Wolfgang Mozart: 1791 Wien – 1844 Karlsbad) である。このふたりのことばに注目してみよう。カール・トーマスが友人に書いた書簡には *wegen* の 3 格支配はなく 2 格支配が 1 例¹⁸⁾、同じくまた、フランツ・クサーヴァーが郡長 (Landrat) に書いた書簡にも 3 格支配はなく 2 格支配が 1 例確認できる。Reiffenstein (2009a) によると、モーツァルト家の人びと（父、母、姉、モーツァルト本人）のことばには多かれ少なかれ上部ドイツ語の特徴が見られるが、「モーツァルトの息子たちの時代になると、ようやく標準語が獲得された」(Reiffenstein 2009a: 54) という。モーツァルトの息子たちによる *wegen* の使用例はわずか 2 例しかないが、この 2 例ともがまさに 2 格支配であったということは、モーツァルトの息子たちが学校教育を通してプロイセン的な標準語を獲得したという仮定を否定するものではない。W. A. モーツァルトの死後、妻コンスタンツェは息子カール・トーマス（当

的・中・上層の話し手（王侯・貴族・将軍・書記等）はほとんど一貫して正規の 2 格を使用している（54/57 例）のに対して、民衆など社会的下層に属する話し手は圧倒的に 3 格を使用（17/22 例）していた (Sato 2016: 409)。また、身分の高い人物が使用する 2 格支配は《教養》のしるしであるのに対して、身分の低い者から高い者に対して使用する 2 格支配は《敬意》の表れであると解釈することができることも主張した (Sato 2016: 416f.)。このような 2 格と 3 格の使い分けは、18・19 世紀ドイツにおいて当然のものとして社会において期待された「思慮分別をわきまえた言語行動」 („politic behaviour“: Watts 1992: 50) であると言うことができる (Sato 2016: 416f.)。

17) ベートーヴェンは、弟ヨハンに宛てた書簡でも筆談帳でも基本的に 3 格を使用している。ベートーヴェンがヨハン宛の書簡で例外的に 2 格を使用しているもの（1822 年 9 月 8 日、24 日付の書簡）が存在するが、これを詳しく調べてみると、実はこれはベートーヴェン自身が書いたものではなく、甥カールによって代筆されたものであった。甥カールの規範意識の強さがうかがえる事例だと言えよう。ちなみに、カールは筆談帳において *während* を 3 例使用しているが、いずれも 2 格支配であった (Sato 2015: 29)。

18) カール・トーマスは同じ友人に、前置詞 *während* の場合も 2 格を使用している。

時 6 歳) をプラハのギムナジウム教師フランツ・クサーヴァー・ニーメチェク (Franz Xaver Niemetschek: 1766 Sadska/Böhmen – 1849 Leopoldstadt) に預け、教育を受けさせた。(その後 14 歳になってカール・トーマスはイタリアへ渡るが、音楽の道は諦め、役人として人生を歩むことになる。) 同じく弟のフランツ・クサーヴァーもプラハのニーメチェクのもとで教育を受けたのちウィーンへ渡り、ヨーゼフ・ハイドンのもとで音楽の勉強を続けた。W. A. モーツァルトの息子たちの時代にはウィーンにおいて標準ドイツ語の規範が広く通用していたので、手紙を書く際には、息子たちは当然のようにして標準ドイツ語の規範に従った (Reiffenstein 2009b: 217 を参照)。

遠いことばの領域に目を転じてみても、『ミュンヘン新聞』と多少時期にずれがあるものの、『ウィーン新聞』においても 19 世紀初頭以降に 3 格が激減し 2 格が激増するという現象が見られた。19 世紀に入って以降の上部ドイツ語圏の新聞における大きな変化、すなわち前置詞 *wegen* の 3 格支配の激減、2 格支配の躍進は、当時の上部ドイツ語圏における新聞の書き手たちにおいてプロイセン的な言語規範¹⁹⁾に従うべきであるという意識が浸透していたことを裏付けるものであると言えるだろう。

19) 18 世紀後半から 19 世紀半ばまでに発行された『ウィーン新聞』(1780 年-1850 年) を検索してみると、“*Adelung*” の名前が登場する記事は 936 にのぼる。すなわち、ウィーンにあっても、アーデルングの影響力は決して小さいものではなかったと考えられる。例えば、1823 年 4 月 25 日付の『ウィーン新聞』(Literarische Anzeigen の欄) ではアーデルングの小辞典 (J.C. Adelung's kleines Wörterbuch) が、「少しでも読み書きできるふつうの人からきわめて教養高い人やことばの能力が高い官吏と学者に至るまで、誰にとっても必要不可欠な必携書」(1823 年 4 月 25 日付、862 頁) として高く評価されており、また 1845 年 3 月 25 日付の『ウィーン新聞』の文芸欄 (Wissenschaftliche und Kunstschriften. Aloys Auer's Sprachhalle.) では、アーデルングの功績は計り知れないほど大きなもので、「人による言語研究として大成功を収めたもの」(1845 年 3 月 25 日付、635 頁) であると称えられている。

参考文献

データ

A-1「新聞コーパス 1750-1850」

データは、オーストリア国立図書館（Österreichische Nationalbibliothek）の Historische Zeitungen und Zeitschriften（ANNO）（<http://anno.onb.ac.at/anno.htm>）およびバイエルン州立図書館（Bayerische Staatsbibliothek: BSB）（<https://www.bsb-muenchen.de/index.php>）から取った（2016 年 2 月 8 日閲覧）。

中部・北部ドイツ語圏の新聞：

Göttingische Anzeigen von gelehrten Sachen 1771-1850 (Göttingen): ANNO,

Zeitung für die elegante Welt 1802-1850 (Berlin/Leipzig): BSB,

Neue Zeitungen von gelehrten Sachen 1750-1772 (Leipzig): ANNO,

Gothaische gelehrte Zeitungen 1774-1804 (Gotha): ANNO,

Neue Jenaische allgemeine Literatur-Zeitung 1804-1848 (Leipzig): ANNO,

Deutsche Allgemeine Zeitung 1845-1850 (Leipzig): ANNO.

上部ドイツ語圏の新聞：

Münchener-Zeitung 1750-1850 (München): BSB,

Wiener Zeitung 1750-1880 (Wien) : ANNO.

A-2 モーツァルト

Mozart. Briefe und Aufzeichnungen. Hrsg. von der Internationalen Stiftung Mozarteum Salzburg, gesammelt und erläutert von Wilhelm A. Bauer und Otto Erich Deutsch, Kommentar und Register bearb. von Joseph Heinz Eibl. 1-4 Bände. Kassel: Bärenreiter. 1962–1975.

A-3 ベー トー ヴェ ン

Ludwig van Beethovens Konversationshefte (1968-2001), herausgegeben im Auftrag der Deutschen Staatsbibliothek Berlin von Karl-Heinz Köhler, Grita Herre und Dagmar Beck. Leipzig: VEB Deutscher Verlag für Musik. [Band 1, Hefte 1-10 (1972); Band 2, Hefte 11-22 (1976); Band 3, Hefte 23-37 (1983); Band 4, Hefte 38-48 (1968); Band 5, Hefte 49-60 (1970); Band 6, Hefte 61-76 (1974); Band 7, Hefte 77-90

(1978); Band 8, Hefte 91-103 (1981); Band 9, Hefte 104-113 (1988); Band 10, Hefte 114-127 (1993); Band 11, Hefte 128-139 mit Registern zu den Bänden 1, 4, 5 und 6 (2001).]

A-4 ゲーテ

Bertram, Mathias (1998) *Johann Wolfgang von Goethe. Briefe, Tagebücher, Gespräche.* (Digitale Bibliothek Band 10) Berlin: Directmedia Publishing.

Bertram, Mathias (2000) *Deutsche Literatur von Lessing bis Kafka.* (Digitale Bibliothek, Band 1) Berlin: Directmedia Publishing.

歴史的辞書・文法書

Adelung, Johann Christoph (1774/1775/1777/1780/1786): *Versuch eines vollständigen grammatisch-kritischen Wörterbuches Der Hochdeutschen Mundart.* 5 Bände. Leipzig: Breitkopf.

Adelung, Johann Christoph (1781): *Deutsche Sprachlehre zum Gebrauche der Schulen in den Königlich Preußischen Landen.* Berlin: Voß. (Nachdruck: Hildesheim/New York: Olms 1977.)

Adelung, Johann Christoph/Schade, Karl Benjamin (1824): *Kleines deutsches Wörterbuch.* Leipzig: Weygand.

Brentano, Heinrich (1870): *Deutsche Grammatik und Stilübungen, zunächst für Gewerb- und Realschulen: In 3 Kursen.* Nürnberg: Schmid.

Campe, Joachim Heinrich (1810): *Wörterbuch der Deutschen Sprache,* Band 5. Braunschweig: Schulbuchhandlung.

Gottsched, Johann Christoph (1748): *Grundlegung einer deutschen Sprachkunst.* Leipzig: Breitkopf.

Siebenkees, Johann Christian (1808): *Über das Hauptgesetz der Teutschen Rechtschreibung, und über Sprachfehler Baierischer Schriftsteller.* Nürnberg: Wittmer.

二次文献

- クーパー、バリー (1997) 『ベートーヴェン大事典』(平野昭・西原稔・横原千史
訳)、平凡社。
- Duden (2009): *Die Grammatik. Unentbehrlich für richtiges Deutsch*, 8., überarbeitete
Auflage. Mannheim u.a.: Dudenverlag.
- Duden (2016): *Die Grammatik. Unentbehrlich für richtiges Deutsch*, 9., vollständig
überarbeitete und aktualisierte Auflage. Berlin: Dudenverlag.
- Elsaß, Stephan (2005): *Sprachgeschichte von unten. Untersuchungen zum geschriebenen
Alltagsdeutsch im 19. Jahrhundert*. Tübingen: Niemeyer.
- Frimmel, Theodor (1926): *Beethoven-Handbuch*. Bd. 1, Bd. 2. Leipzig: Breitkopf&Härtel.
(Nachdruck: Hidesheim: Olms 1968).
- Hentschel, Elke/Weydt, Harald (2013): *Handbuch der deutschen Grammatik*. 4.,
vollständig überarbeitete Aufl. Berlin: de Gruyter. (ヘンツェル、エルケ / ヴァイト、
ハラルト (1994) 『ハンドブック現代ドイツ文法の解説』(西本美彦、高田博行、
河崎靖訳)、同学社。)
- Koch, Peter/Oesterreicher, Wulf (1985): »Sprache der Nähe - Sprache der Distanz.
Mündlichkeit und Schriftlichkeit im Spannungsfeld von Sprachtheorie und
Sprachgeschichte.« In: *Romanistisches Jahrbuch* 36, S. 15-43.
- Rayson, Paul (2016): *Log-likelihood calculator*. <http://ucrel.lancs.ac.uk/llwizard.html>
(2016年8月10日閲覧)。
- Reiffenstein, Ingo (2009a): Sprachvariation im 18. Jahrhundert. Die Briefe der Familie
Mozart Teil I. In: *Zeitschrift für Germanistische Linguistik*. 37/1, S.47-80.
- Reiffenstein, Ingo (2009b): Sprachvariation im 18. Jahrhundert. Die Briefe der Familie
Mozart Teil II. In: *Zeitschrift für Germanistische Linguistik*. 37/2, S.203-220.
- ロックウッド、ルイス (2010) 『ベートーヴェン音楽と生涯』土田英三郎・藤本
一子・沼口隆・堀朋平訳、春秋社松柏館。
- 佐藤恵 (2015) 「前置詞 *wegen* の格支配の変遷一言語変化に関わる言語意識をめ
ぐって」、『学習院大学ドイツ文学会研究論集』第19号、95-133頁。
- Sato, Megumi (2015): „wegen dem Clavier“. Die Beethovens und der Rektionswandel der
Präpositionen *wegen*, *statt* und *während* im Zeitraum von 1520–1870. In:

Muttersprache. Vierteljahrsschrift für deutsche Sprache. (Wiesbaden: Gesellschaft für deutsche Sprache) Band 125, S.23–56.

Sato, Megumi (2016): Soziopragmatische Untersuchungen zur Kasusreaktion bei *wegen* in inszeniert mündlichen Texten des 18. und 19. Jahrhunderts. In: *Sprachwissenschaft.* (Heidelberg: Carl Winter) Band 41, S. 403-420.

Sterba, Editha/Sterna, Richard (1964): *Ludwig van Beethoven und sein Neffe. Tragödie eines Genies. Eine psychanalytische Studie.* München: Szczesny Verlag. (シュテルバ、エディッタ / シュテルバ、リヒャルト (1970) 『ベートーヴェンとその甥—人間関係の研究—』(武川寛海訳) 音楽之友社。)

Watts, Richard J. (1992): Linguistic politeness and politic verbal behaviour: Reconsidering claims for universality. In: Watts, Richard/Ide, Sachiko/Ehlich, Konrad (eds.): *Politeness in language. Studies in its History, Theory and Practice.* Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

(さとう・めぐみ 学習院大学人文科学研究科博士後期課程)

Zum Normbewusstsein im oberdeutschen Sprachraum im 18. und 19. Jahrhundert

Überlegungen anhand der Kasusrektion bei *wegen* in Zeitungen,
Privatbriefen und Konversationsheften

Megumi Sato

In Sato (2015) hat die Verf. die historische Entwicklung der Rektion bei *wegen* aufgrund der Daten ihres „Gebrauchstexte-Korpus von 1520–1870“ untersucht. Als wichtigste Ergebnisse dieser Analyse lassen sich die folgenden Tendenzen feststellen: 1) Diatopik: Die Frequenz der Dativ-Variante in den Texten aus den oberdeutschen Sprachregionen ist statistisch signifikant höher als in denen aus den mittel- und norddeutschen Regionen. 2) Diachronie: Die Dativrektion nimmt nach 1800 plötzlich ab. Diese Abnahme des Dativs wird entscheidend durch die Verminderung der Dativ-Variante in den oberdeutschen Sprachregionen verursacht. Diese Feststellungen zeigen, dass – diatopisch gesehen – der oberdeutsche Sprachraum bei der Veränderung der Kasusrektion bei *wegen* nach 1800 eine wesentliche Rolle spielt, anders formuliert, dass das Sprach- bzw. Normbewusstsein bei oberdeutschen Autoren um 1800 eine entscheidende Veränderung erfährt. Auf das Normbewusstsein im oberdeutschen Sprachraum um 1800 soll sich die vorliegende Arbeit beziehen. Zur Präzisierung und Ergänzung der Ergebnisse des „Gebrauchstexte-Korpus“ werden aus dem Zeitraum 1750–1850 einerseits als distanzsprachliche Texte Zeitungen und andererseits als eher nächstsprachliche Texte Privatbriefe der Familie Mozart und Konversationshefte von Beethoven untersucht.

Die Ergebnisse im Zeitungskorpus, nämlich die höhere Frequenz der Dativ-Variante aus der oberdeutschen Sprachregion und die Abnahme der Dativrektion nach 1800 in der *Münchener-Zeitung* sowie in der *Wiener Zeitung*, stimmen mit denen im „Gebrauchstexte-Korpus“ überein. Durch die kontrastive Analyse dieser Texte aus dem oberdeutschen Sprachraum lässt sich in Bezug auf das Sprachbewusstsein im oberdeutschen Sprachraum

in der Zeit von 1750 bis 1850 insgesamt Folgendes ableiten:

- 1) Der häufigere Gebrauch des Dativs bei *wegen* in den Konversationsheften von Beethoven und in den Briefen von Leopold Mozart an seine Familie sprechen für die Nähesprachlichkeit der Dativvariante im damaligen oberdeutschen Sprachraum.
- 2) Der häufige Genitivgebrauch bei Leopold Mozart in seinen Briefen an Nicht-Familienangehörige in der zweiten Hälfte des 18. Jahrhunderts ließe sich auf seine hohe Schulausbildung zurückführen, die sich nachweislich an Gottscheds Grammatik ausrichtete.
- 3) Adelung schrieb in seiner *Deutschen Sprachlehre zum Gebrauche der Schulen in den Königlich Preußischen Landen*: „Es (= *wegen*) mit dem Dativ zu verbinden [...] ist im Hochdeutschen fehlerhaft“ (Adelung 1781: 349). Seitdem ist die Dativrektion an unterschiedlichen Grammatiken und Wörterbüchern als ‚fehlerhaft‘ bewertet worden. Die Genitivrektion war „im 19. Jahrhundert nicht in der Alltagssprache verwurzelt, sondern ein Merkmal gebildeter Schreibender“ (Elspaß 2005: 321). Beethovens Neffe Karl „sprach“ nun im frühen 19. Jahrhundert gegenüber seinem Onkel fast immer mit dem Genitiv. Dieser Neffe hatte sich möglicherweise unter dem Einfluss der an den Schulen vermittelten Normen das Sprachbewusstsein entwickelt, bei *wegen* sei der Genitiv normgerecht und also distanzsprachlich. In dem gleichen Kontext ließe sich der Genitiv-Gebrauch bei den Söhnen Mozarts als Ergebnis der erfolgreichen Rezeption der preußischen Norm verstehen. Reiffenstein (2009) bemerkt: „Die Basis für die schreibsprachliche Entwicklung aller Mitglieder der Familie Mozart bildete die oberdeutsche Tradition. [...] Ziel der Entwicklung ist das neue Hochdeutsch Leipziger Prägung. Aber erst Mozarts Söhne sind an diesem Ziel angelangt.“ (Reiffenstein 2009a: 54).
- 4) Die große Veränderung der Kasusrektion bei *wegen* in den Zeitungen im oberdeutschen Sprachraum nach 1800, nämlich die Zunahme der Genitivrektion bzw. die Abnahme der Dativrektion, ließe sich auf die mehr oder weniger bewusste Orientierung der oberdeutschen Journalisten an der preußischen Sprachnorm zurückführen. Man dürfte dann annehmen, dass sich die Adelung’schen Regeln auch unter ihnen erfolgreich verbreiteten.

